

本書は、はじめて政治学を学ぶ人のための教科書です。

学びの出発点は、高校で学んだ地理歴史や公民です。ここでは、日本史、世界史、地理、倫理、政治・経済の各科目（「歴史総合」「日本史探究」「世界史探究」「地理総合」「地理探究」「公共」「倫理」「政治・経済」や、以前の「世界史A・B」「日本史A・B」「地理A・B」「現代社会」）のいくつかを勉強したみなさんを読者として想定しています。高校で学んだ知識を無駄にせず、大学での学びにうまくつなげてみましょう。

「勉強していない科目がある」「もう覚えていない」「自信がない」「暗記科目は苦手だから嫌い」。そんな不安を感じる必要はありません。分からない言葉が出てきたら、高校の教科書や参考書で復習したり、図書館やインターネットで調べたりすれば、本書は、1人でも読み進めることができるはずです。地理歴史や公民と聞くと、暗記科目と思う人もいるかもしれませんが、大学での学びは暗記ではありませんので、怖がらないでください。

本書は、高校を卒業して、選挙権を手にしてまもない若いみなさん、あるいは、大学で一から政治学を学ぶみなさんを主たる読者に想定していますが、しかし、学びに年齢は関係ありません。この本は、「政治について一から知りたい」「政治学を学んでみたい」という一般の読者のみなさんの思いにも十分にお応えできるはずです。

いきなり「再分配」「右」「左」「イデオロギー」と言われても

高校の科目を出発点にするというのは、高校を卒業したばかりのほとんどの人が知らないことは、学びの前提にはしない、という意味です。

図書館や大きな書店の政治学のコーナーをぜひ一度覗いてみてください。政治学の教科書は、すでにたくさん出版されています。それなのに、なぜ、この『政治学入門——歴史と思想から学ぶ』が書かれたのでしょうか。よい教科書がますます増えてきたが、最近、教科書の内容が少しずつ難しくなっている。本書の著者たちは、そう観察しています。いま本屋さんに並ぶ教科書はど

れもよくできていて、新しい研究成果もふまえたすばらしいつくりですが、高校を卒業したばかりのみなさんには、少し難しいものもあります。

この本の3人の著者は、これまで、さまざまな大学で、政治学の入門科目を教えてきました。大教室の講義から、少人数の1年生ゼミに至るまで、さまざまなクラスを担当しました。そのなかで、わたしたちが学んだことがいくつもあります。「再分配」「諸価値の権威的配分」「右」「左」「イデオロギー」「霞ヶ関」といった言葉は、高校ではきちんと学んでいないのに、大学の授業では、当たり前のように説明もなく使われていて、居心地が悪い。そんなふうに感じている学生がかなりいることに、気づかされました。「正統性」「保守主義」「社会主義」「公共性」という言葉や、『ユートピア』や『1984年』などの作品のように、いまの多くの教科書ではきちんと説明されていない、政治学の基本的知識がたくさんあることにも気づきました。

「わたしも、いま挙がった言葉の意味はよく分からない」。この本は、そのように感じるみなさんを念頭に置いて書かれています。だから、いまは不安を感じていても心配することはありません。最先端の知識を学ぶことは、もちろんとても大事なことです。しかし、最初は、基礎をきちんと学ぶことが必要です。スポーツにたとえると、都道府県大会や全国大会（さらには国際大会）をめざす前に、まずは体力づくりをしましょうということです。

本書は、政治学を専門的に学ぶときの最初の一冊として、あるいは、教養科目で政治学を学ぶための一冊として書かれました。ここでは、基本的な知識から最新の研究成果までを見渡したうえで、最初に学ぶべきことを選びすぐって、できるだけ分かりやすい説明を心がけました。この本で政治学の「体力づくり」をして、次にもっと専門的な教科書で知識を深めるという学びをおすすめします。

何のために政治学を学ぶの？

「政治学を学ぶことは、わたしの人生にとって、どんな意味があるのだろうか？」（いや、意味はないはずだ！）

直感的にこんな印象をもつのは、ある意味では健全と言えるかもしれません。テレビやインターネットで見聞きする政治の世界は、「おっさん」ばかりで、

自分とは縁遠い、ダークな世界に感じられても不思議ではないからです。あるいは、声高な批判や非難が飛び交う政治の世界に、よい印象をもっていない人もいるはずです。

政治学を学ぶ「うまみ」や「見返り」は何でしょうか。卒業に必要な単位になる、公務員試験の試験対策になる、という点を除くとすれば、どんなよいことがあるのでしょうか。

堅苦しいことやお説教よりも先に、まずなにより、シンプルに「ルールやしくみを知らない、楽しめませんよ」という点を挙げておきたいと思います。

ここでも、スポーツにたとえてみましょう。ラグビーやカーリングの人気の高まった頃の記憶があるでしょうか。その他、野球、サッカー、フィギュアスケート、スノーボード、ラクロスなど、何でもいいですが、ルールやしくみをよく知らない、スポーツ観戦を楽しむことはできません。どんな「好ゲーム」であっても、ルールやしくみを知らない、観客として楽しみようがありません。

人類の歴史を振り返ってみると、政治は、人を虜にして夢中にさせたり、進んで自己犠牲や奉仕を捧げさせたりすることすらあった、危険な魅力をもつ営みです。いまでも、選挙があるたびに、夢中になって夜遅くまで開票番組を見る人は少なくありません。スポーツと同じように、損得だけでは説明できない、人を魅きつける何かがあるのです。政治の「好ゲーム」を観客として楽しむためには、政治のルールやしくみを知っておかなければなりません。ルールやしくみが分かって、「観客としてのスキル（腕前・能力）」が上がり、プレーヤーたちのうまい・下手が区別できるようになると、政治の世界を楽しく観察できるようになります。あまりにお気楽・軽薄である、あるいは不真面目・不謹慎である、と思う人もいるかもしれませんが、わたしたちの人生で、こうした「楽しみ」はとても大事なことです。もっと実用的な言い方をすれば、「観客としてのスキル」が上がると、毎日のニュースをよく理解できるようになります。ニュース番組や新聞で理解できるのはスポーツと天気だけ、という大人ではまずいと思いませんか。

もちろん、政治学を学ぶ「うまみ」は、これだけではありません。わたしたちは、単なる観客ではないからです。スポーツでは「プレーヤー」たちが下手

でも、ただ退屈なだけですが、政治の世界では、「プレーヤー」たちが下手だと、わたしたち自身に実害がふりかかります（税金が上がったり、景気が悪くなって収入が減ったり、戦争に巻き込まれたりします）。政治はみんなに関わることを決める営みですから、自分も巻き込まれて、悪影響をこうむるかもしれないのです。そんな政治のルールやしくみを知っておくことは、無意味ではないでしょう。これは、「有権者としてのスキル」を高めるということです。

さらに、自分がプレーヤーになることだってあります。第1章で詳しくご案内するように、日本には3万人を超える議員（政治家）の枠があり、いまは縁遠く思っているかもしれませんが、みなさんも政治家という仕事を将来の選択肢として考えてもよいかもしれません（付け加えると、立候補にあたっては学歴や能力試験・資格試験は一切不要です）。でも、気をつけてほしいのは、政治家だけが、政治の「プレーヤー」ではないということです。政治で求められるのは、集団のなかで1つの決定まで導くスキルや、メンバー全員がうまく共存できるようにするスキルですから（→第1章）、家庭、学校、バイト先、職場、サークル、友人関係など、どんな集団でもこのスキルは発揮できます。たとえば、「みんなで決める」というゲームのルールのもとでは、「敵をつくる」よりも「味方をつくる」ことのほうがはるかに重要である（しかも難易度が高い）という点をふまえて「政治のスキル」を高めると、日常生活でも応用がきくのです。

リベラル・デモクラシーというしくみ

日本を含む現在の先進諸国では、リベラル・デモクラシーというしくみのもとに、政治がおこなわれています。リベラル・デモクラシーは、そのまま直訳すれば「自由民主主義」と訳すことができます。「リベラル」（リベラリズム、自由主義）と、「デモクラシー」（民主政治、民主主義）という2つを結びつけていることから分かるように、リベラル・デモクラシーは、リベラリズムを尊重するタイプのデモクラシーのことを意味します（つまり、そうではないタイプのデモクラシーもあるのです）。

カタカナばかりで、分かりにくいですね。これからこの本では、リベラル・デモクラシーという政治のしくみをさまざまな角度から学んでいくのですが、この「はじめに」で必要となる範囲で、少しだけ説明しておきましょう。

2つの言葉のうち、**デモクラシー**については、みなさんも、多かれ少なかれ、すでにイメージをもっているはずですが、高校までは「民主主義」という訳語で学んできた人も多いはずですが、いまの政治学では「**民主政治**」（あるいは民主政）という訳語を使うことが多くなっています。1つの理由として、「～主義」は、「～イズム」の訳語であり、思想や考えを表現する言葉だからです（たとえば、リベラリズムは自由主義、コミュニズムは共産主義、アナーキズムは無政府主義という思想です）。デモクラシーという言葉は、確かに「みんなで決める」という**思想**も意味しますが、しかし同時に、「みんなで決める」ための**制度やルール**も意味します。そのためこの本では、この言葉は原則として「デモクラシー」とカタカナで表現することにして、文脈に応じて「民主政治」や「民主主義」などの訳語も用います。

もう1つの**リベラリズム（自由主義）**は、とても厄介な言葉で、この言葉が出てきたら要注意です。これは、政治学ではいくつもの違った意味で使われる言葉です。この本のなかでも、いくつもの違う意味のリベラリズム（自由主義）が登場します（→**Column ①-1**）。

ただし、「リベラル・デモクラシー」という言葉に含まれる「リベラル」（リベラリズム）の意味はとてもはっきりしていて、誤解の余地はありません。それは、「一人ひとりの自由や自己決定を尊重する」「自分のことは自分で自由に決める」という自由主義の思想を意味します。これは、「社会のだれであっても、政府であっても、一人ひとりの自由や自己決定を侵すことはできない」という、自由主義社会の大原則を支える思想です。こうした自由主義の思想がめざすべき姿（理念）を実現するために、さまざまな制度やルールがつくられてきました。一人ひとりの自由や自己決定を守るために、バリアをつくって殻をつくるように、だれも侵害してはならないものを「人権」として定めて守ったり、政治権力の濫用や暴走を防ぐために、互いに牽制し合う「**権力分立**」というチェック・アンド・バランスの制度を設けたりするのは、その代表例です（詳しくは**第4章**や**第8章**などで学びます）。

さて、「一人ひとりの自由や自己決定を尊重する」と、「みんなのことはみんな
で決める」を組み合わせたのが、リベラル・デモクラシーです。この言葉は、
そのような考え（思想）を意味する場合もあれば、そうした考えを実現するた

Column ①-1 自由主義, リベラリズム, リベラル

リベラリズム（自由主義）について、「一人ひとりの自由や自己決定を尊重する」という基本的な考えや、これを実現するための制度やルールについて説明しました。現在では、こうした自由主義の考えや制度やルールには、おおよその合意（**コンセンサス**と言います）があり、「廃止しよう」という意見は稀です。したがって、これらは現代政治の舞台設定になっていると言えます。

ところが、ややこしいことに、その舞台設定の上では、「自由主義」を名乗るいくつもの思想や政治勢力があって、互いに争っています。「一人ひとりの自由や自己決定」をどのような手段や方法で実現するか、という点で考えが分かれるために、いくつものタイプの自由主義が存在するのです。一種の本家本元争いです。大きく分けて、「一人ひとりの自由や自己決定」のために、政府の強制や介入や規制はできるだけ少なくしよう、という第1の立場と、「一人ひとりの自由や自己決定」をだれもが同じように手にするために、政府が積極的に介入して、恵まれない人をサポートすべきである、という第2の立場が争っています（→第8章、第10章、第12章）。

日本の政治学では、この2つを区別するために、第1について、「**古典的自由主義**」や漢字表記の「自由主義」という言葉で表現し、第2については、カナ表記で「**リベラリズム**」や「**リベラル**」と書くことが一般的です。20世紀中頃には第2の立場が優勢でしたが、1980年代以降は、第1の立場を新しく復活させようとする立場が強くなっており、これを「**新自由主義**」や「**ネオリベラリズム**」と呼びます。紛らわしいですね。政治の世界ではよくあることですが、「自分たちこそが本家本元である」と主張して、「自由主義」という言葉やシンボルをめぐる争っているわけです（この本では、こうしたややこしさをふまえて、この言葉については表記を統一せず、文脈に応じて言葉を使い分けます）。

ここまでで十分に厄介ですが、さらにややこしいことに、呼び方には地域による違いもあり、アメリカでは、第1と第2の対立を「保守主義 vs. リベラリズム」と表現するのに対して、ヨーロッパでは「自由主義 vs. 社会民主主義」とするのが普通です。さらに、「国際政治学におけるリベラリズム」は、これらとはまた区別されます（→第13章）。自由主義やリベラリズムのややこしさを説明できるようになったら、政治学の初級は卒業です。この本を読み終わる頃には、きちんと説明できるようになっているでしょう。

めの制度やルールを意味する場合がありますし、思想も制度も含めた全体のしくみ（政治体制）を意味する場合があります。

この時点で、まず注意しておいてほしいことが2つあります。

1つ目は、「リベラリズム（自由主義）」と「デモクラシー」が違うという点をきちんと理解して、この2つを混同しないようにすることです。「一人ひとりの自由や自己決定を尊重する」と「みんなで決める」の2つは、いつでも相性がよいわけではありません。たとえば、「みんなで決める」が行き過ぎると、「一人ひとりの自由や自己決定を尊重する」を損ねてしまう場合があります（いじめや仲間はずれでは、これに似たことが生じています）。だから、「みんなで決める」に歯止めをかけて、決めさせないこと、あるいは慎重に決めさせることも、ときには必要になってきます。言い換えると、「みんなで決める」デモクラシーのしくみに対して、自由主義は、「決めすぎない」ことや「決めない」ことを求めるところがあるのです（→第4章）。

もう1つ注意してほしいのは、ひとくくりに「リベラル・デモクラシー」や「デモクラシー」といっても、内実はさまざまで、いくつものバージョンがあるという点です。この本では、「ほんとうのデモクラシー」や「まっとうなデモクラシー」という独自のキーワードを使って、デモクラシーのいくつかのバージョンを学びます。また、たとえば、大統領制を採用するか、議院内閣制を採用するか、あるいは小選挙区制か、比例代表制かというぐあいに、「自由主義」や「デモクラシー」の理念を実現するために、どのような制度設計がよいか、という点では、いろんな選択肢があります。さらに、これとは別に、どれくらいリベラル・デモクラシーを実現できているか、という点でも濃淡があり、違いがあります。100点満点で点数化してみたときに、90点を超えるようなリベラル・デモクラシーの国もあれば、60点ぎりぎり、なんとかかろうじてリベラル・デモクラシーとみなすことのできるような国もあるということです。

この本のつくり

この本では、このリベラル・デモクラシーというしくみに注目して、政治を学んでいきます。

第1部「いまの政治はどのように動いているか」（第1章～第5章）では、み

なさんが最も具体的にイメージしやすい、いまの日本の政治を取り上げながら、現在のリベラル・デモクラシーについて学びます。高校までの学習では、政治を学ぶといっても、「衆議院は定数が465」「衆議院の選挙制度は小選挙区比例並立制」というぐあいに、国会や選挙の形式的なしくみを覚えることがほとんどだったはずですが。確かに、そうした形式的なしくみは、政治の前提としてとても重要ですが、しかし、それだけでいまのリベラル・デモクラシーの政治が分かるわけではありません。形式的なしくみだけではなく、実際の政治の動き（政治過程）を知る必要があるのです。第1部では、いまの現実の政治が実際にどのように動いているのかというしくみや、それぞれの制度を支えている考え方（思想）について学びます。

第2部「リベラル・デモクラシーの歩み」（第6章～第10章）では、日本と西洋世界の歴史を振り返って、リベラル・デモクラシーの成り立ちについて学びます。

リベラル・デモクラシーは、長い歴史の歩みのなかでつくられてきました。かつてはデモクラシーという政治体制は珍しく、身分制にもとづく君主政（一人支配の政治体制）が古今東西を通じてほとんどでした。古代ギリシアにはデモクラシーがありましたが、いまのようなリベラル・デモクラシーは、近代になってから、試行錯誤のなかで徐々にカタチづくられたものです。現在までの道のりは決して一本道ではなく、君主政、ファシズム、共産主義といった強力なライバルがいくつも存在しました。競争のなかで、ライバルのよいところも取り入れるなどして修正を繰り返した結果として、いまのリベラル・デモクラシーのかたちができあがったのです。

第2部のような歴史からの学びを重視するのは、本書の特徴の1つです。冒頭でも触れたように、高校で学んだ日本史や世界史の知識をステップにして、大学で新しく政治学を学ぶ、というのが、この本のねらいの1つです。ただし、歴史をふまえるのは、単に、高大接続（高校と大学の学びを結びつけること）だけが理由ではありません。いまの政治は、長い歴史の歩みの上に成り立っているので、現代の政治についてきちんと理解するためにも歴史の知識が欠かせないのです。歴史というと、「暗記科目か」と怖がる人がいるかもしれませんが、それは誤解です。ここでの目的は暗記ではなく、歴史の大まかな流れをたどる

ことを通じて、政治学の基本知識を理解することです。これまで日本史や世界史をきちんと学んでこなかった人は、新たに歴史を学ぶきっかけとして、すでに学んできた人は、これまでとは違う政治学の視点から歴史をとらえる新しい学びとして、歴史に親しんでみてください。

最後の第3部「これからの政治」(第11章～第14章)では、リベラル・デモクラシーのしくみやそれを支える思想をさらに掘り下げて、そこに潜むさまざまな課題や問題点を明らかにしていきます。

20世紀末に冷戦が終わると、社会主義体制が崩れてライバルがいなくなり、リベラル・デモクラシーが勝ち残ったようにも思われました(→第13章)。ところが、そこから30年を経て、いまやリベラル・デモクラシーは大きく揺らいでいます。リベラル・デモクラシーのうちの「デモクラシー」はどうでしょうか。政治家は、本当にわたしたちの代表として行動しているのでしょうか。経済的な格差が、「みんなで決める」というデモクラシーの基礎を危うくしていないのでしょうか。「みんなで決める」はずが、たとえば性別による差別が残っていないのでしょうか。リベラル・デモクラシーのうちの「リベラル」に目を向けるならば、監視カメラとインターネットの時代に、自由や自己決定はどうなっていくのでしょうか。なにより、「リベラル」と「デモクラシー」の2つは、いつでも相性がよいわけではないという点に注意が必要です。みんなで決めた結果、「A(個人ないし集団)の自由は認めない」という決定に至ることもあるからです。

本書は、このような3部構成のもと、歴史や思想をふまえながら、リベラル・デモクラシーのしくみを解き明かします。本のなかでは、同じテーマや同じ内容が何度も登場することがありますが、いくつもの視点や文脈から繰り返し学ぶことを通じて、重要なポイントについて理解を深めることがねらいです。「ルールやしくみを知らないで、楽しめませんよ」と書いた意味が、最後には分かってもらえるはずです。

この本は、学生のみなさんが、一人でも読むことができるように書かれています。授業の前に予習のために一読したうえで、授業で詳しい説明や解説を聞いて、授業後に復習のためにもう一度読む。そんな使い方ができますが、この点は、授業を担当する先生の指示に従ってください。

それぞれの章の最初にある「KEYTEXT」では、その章の手引きとなる文章や言葉、ぜひ知っておいてほしい政治学の古典を紹介しました。「Column」では、政治学を学ぶにあたって注意すべき点や、押さえておくべきポイントをまとめました。各章の終わりには、復習用の課題「考えてみよう」や、次に読んでほしい3冊を挙げた「さらに学ぶために」に加えて、学びの世界を広げるために、「映画で学ぼう」で、各章に関わりのある映画を紹介しています。教科書や講義を通じた学びに飽きてしまったら、映画の世界にどうぞ。さまざまな角度から政治を学ぶための教材として、新聞やニュース番組や映画に積極的に親しむことをおすすめします。

犬塚 元 (いぬづか はじめ) [はじめに, 第 1, 5, 9, 13, 終章担当]

1971 年生まれ。

1994 年, 東京大学法学部卒業。99 年, 東京大学大学院法学政治学研究科博士課程単位取得退学。博士 (法学)。

現在, 法政大学法学部教授。

専門は, 政治学史・政治思想史。

主な著作に、『デイヴィッド・ヒュームの政治学』(東京大学出版会, 2004 年), 『啓蒙・改革・革命』(岩波講座政治哲学 2) (編著, 岩波書店, 2014 年), 『自然宗教をめぐる対話』(翻訳, 岩波文庫, 2020 年), など。

河野 有理 (こうの ゆうり) [第 2, 3, 4, 6, 7 章担当]

1979 年生まれ。

2003 年, 東京大学法学部卒業。08 年, 東京大学大学院法学政治学研究科博士課程修了。博士 (法学)。

現在, 法政大学法学部教授。

専門は, 日本政治思想史。

主な著作に、『明六雑誌の政治思想——阪谷素と「道理」の挑戦』(東京大学出版会 2011 年), 『田口卯吉の夢』(慶應義塾大学出版会, 2013 年), 『偽史の政治学——新日本政治思想史』(白水社, 2016 年), など。

森川 輝一 (もりかわ てるかず) [第 8, 10, 11, 12, 14 章担当]

1971 年生まれ。

1995 年, 京都大学法学部卒業。京都大学大学院法学研究科博士課程満期退学。博士 (法学)。

現在, 京都大学公共政策大学院教授。

専門は, 西洋政治思想史, 現代政治理論。

主な著作に、『〈始まり〉のアーレント——「出生」の思想の誕生』(岩波書店, 2010 年), 『講義 政治思想と文学』(共編著, ナカニシヤ出版, 2017 年), など。

はじめに——政治学によるこそ i
いきなり「再分配」「右」「左」「イデオロギー」と言われても (i)
何のために政治学を学ぶの？ (ii) リベラル・デモクラシーとい
うしくみ (iv) この本のつくり (vii)

第1部 いまの政治はどのように動いているか

CHAPTER 1

仕事としての政治 2

どんな人が、何をしているのか

- 1 政治家——選挙で選ばれて政治を仕事にする 4
議員の収入 (5) 政治家は何をしているか (6) どんな人が議
員になっているか (8)
- 2 官僚——試験で選ばれて政治を仕事にする 10
給与や昇進 (12) 「ニーズの翻訳家」としての仕事 (13)
- 3 社会から政治に働きかける 15
自分の利益を守る、社会を変える (15) 利益集団はどのように
政治に働きかけるか (16) 集団がつくる政治 (18)

CHAPTER 2

選挙 23

政治家の就活？

- 1 選挙はお嫌いですか 25
お行儀がよすぎない？ (25) 「賢い有権者」のまぼろしを追っ
て (28) 「賢さ」のパラドックス (29)
- 2 選挙はいらないか 30
他にどんなやり方があるの？ (30) 消極的な擁護 (32) (や
や) 積極的な擁護 (34)
- 3 技術的な改善点 37
一人一票 (37) 多数決 (38) 選挙制度 (38)

CHAPTER 3

政党

42

集団とデモクラシー

- 1 利益集団と政治 44
デモクラシーは団体戦 (44) 2つの合理性 (45)
- 2 政党の機能と役割 47
政党が果たしている役割 (47) 政党システムと政党の数 (48)
- 3 政党をめぐる歴史と思想——どんな政党がいままであったのか … 52
思想史から (52) 世界史から (53) 戦前の日本の場合 (54)
戦後の日本の場合(1)——一党優位体制 (56) 戦後の日本の場合(2)——二大政党制? (57) 政党のこれから (59)

CHAPTER 4

政体と政治過程

63

「決めすぎない」ためのデザイン

- 1 議会のデザイン 65
多数決型とコンセンサス型 (65) 「審議の府」か「闘技の府」か (65) 二元代表制 (大統領制) (68)
- 2 統治機構のデザイン——官僚・司法・中央銀行 71
政治家と官僚 (71) 司法府と立憲主義 (74) 内閣法制局 (75) 中央銀行 (75)
- 3 いくつもの「みんな」——地方と国際関係 77
地方政府と中央政府 (77) 国際関係 (77)

CHAPTER 5

政治とメディア

82

政治家はイメージと見栄えが命?

- 1 リベラル・デモクラシーのなかのメディア 84
メディアの役割 (84) 政治的情報のバイアス (87)
- 2 イメージを操作する 89
政治アクターのイメージ戦略 (90) 歴史のなかのプロパガンダ (91)
- 3 メディアにはどれほど影響力があるか 93
メディアより知り合い (94) 現実をどのように理解するか (95) インターネットと政治 (95)

第2部 リベラル・デモクラシーの歩み

CHAPTER 6

近代日本のリベラル・デモクラシー

102

1868～1945年

- 1 江戸時代——～1868年 104
「日本国」意識 (104) イエ・ムラ・藩 (104) 関東と禁裏 (105) 合議と公議 (107)
- 2 議会と政党——1868～98年 109
革命 (109) ウェストミンスター・モデル (110) 憲法と初期議会 (111) 藩閥・元老 (113)
- 3 リベラル・デモクラシーの成熟と崩壊 114
——1898～1945年
戦争・植民地・参政権 (114) 二大政党制の栄光と挫折 (115) 崩壊 (118)

CHAPTER 7

戦後日本のリベラル・デモクラシー

122

1945年～現在

- 1 第1の戦後 124
——占領民主主義と「立法者」アメリカ 1945～60年
占領と立法者 (124) 女性参政権 (125) 自由民主党と55年体制 (126) 分水嶺としての1960年 (128)
- 2 第2の戦後? 130
——55年体制の定着 1960～93年
経済成長とデモクラシー (130) 分権的な統治構造 (132) 冷戦期の思想環境 (133) 成長の夢と「インサイダー政治」 (134) バブルと保守回帰 (135)
- 3 第3の戦後? 136
——「55年体制」の崩壊と平成デモクラシー 1993年～現在
55年体制の崩壊と政治改革 (136) 「首相支配」の平成デモクラシーへ (138)

CHAPTER 8

リベラル・デモクラシーのめばえ

142

近代西洋の経験

- 1 議会制と立憲主義 144
王政と身分制議会 (144) 立憲主義——権力の集中を防ぐしくみ (146)
- 2 個人の自由——宗教戦争の経験と自由主義の形成 148
政治と宗教 (148) 公と私を区別する (150) 市場と文明社会 (152)
- 3 代表制と政党政治——アメリカ革命における制度設計 153
代表制と権力分立 (154) 複数の党派の競争 (156)

CHAPTER 9

国民国家と民主化の時代

159

フランス革命と「長い19世紀」

- 1 現代政治の出発点としてのフランス革命 161
人民主権と「人間の権利」(162) 右と左の起源 (163) 理想の暴走 (165)
- 2 国民国家とナショナリズム 166
ネーションによるデモクラシー (167) ネーションをめぐる学説 (168) 国民化の過程 (169)
- 3 大衆デモクラシーの時代 171
民主化を疑う (172) 「人類の歴史は、エリート交替の歴史」(174)

CHAPTER 10

イデオロギーと世界戦争

178

「短い20世紀」のリベラル・デモクラシー

- 1 社会問題と社会主義——平等な社会をめざして 180
マルクスの資本主義批判 (180) 革命か、改良か (182) 「ベル・エポック」と帝国主義 (184)
- 2 総力戦と全体主義——リベラル・デモクラシーの危機 184
ファシズムの台頭——リベラルでないデモクラシー (185) 自由なき平等 (186)

- 3 リベラル・デモクラシーの繁栄——冷戦のもとで…………… 189
 戦後コンセンサスと福祉国家 (190) 成長の終わりとは戦後コン
 センサスの解体 (190)

第3部 これからの政治

CHAPTER 1

1

デモクラシーというやり方 198

「まっとうなデモクラシー」と「ほんとうのデモクラシー」のあいだ

- 1 「まっとうなデモクラシー」のしくみ——競争と代表 …………… 200
 競争的選挙による権力の正統化 (200) 利益をめぐる開かれた
 競争 (201) だれを、どのように代表するのか (203)
- 2 「ほんとうのデモクラシー」を求めて——代表制批判の系譜 … 205
 みんなで決める——ルソーの一般意志 (205) みんなで話し合う
 ——アレントの公的領域 (207)
- 3 代表制を補完する？——デモクラシーのゆくえ …………… 208
 ポピュリズム (209) 話し合いのデモクラシー——熟議の試み
 (210)

CHAPTER 2

2

公と私 215

福祉国家か、自己責任か

- 1 政府と市場…………… 217
 私的財と公共財 (217) 政府の仕事はどこまでか (218)
- 2 福祉国家をめぐる——政府による再分配は是非か…………… 220
 ロールズの格差原理 (220) ノージックのリバタリアニズム
 (221) 個人と社会の関係をどう考えるか (223)
- 3 福祉が映し出す社会…………… 224
 男性稼ぎ手モデル (224) 日本型福祉社会 (226) 育児や介
 護はだれの仕事？——公と私の再定義 (228)

CHAPTER 13

国境を越える政治

232

国際政治の歴史と課題

- 1 国連がなかった時代 234
リベラリズムの源流 (234) リアリズムの源流 (237) 第二
次世界大戦と国際連合 (238)
- 2 冷戦の時代 239
冷戦のなかの脱植民地化 (240) 冷戦下の日本 (241)
- 3 冷戦終焉後の世界 243
グローバル化と主権国家 (243) 「模倣の罠」(245) 国境線
を越える課題 (246)

CHAPTER 14

ユートピアとディストピア

251

政治のゆくえ

- 1 理想の探求, 現実への批判——ユートピア論の古典 253
プラトンの理想国家 (253) トマス・モア『ユートピア』(255)
徳のユートピア (256)
- 2 欲望のユートピア 257
『すばらしい新世界』の偏った性規範 (258) 優生学の欲望
(260)
- 3 AI とビッグデータの時代に 263
幸福な監視社会? (263) 分断と孤立の時代のデモクラシー?
(266)

CHAPTER 終

政治学はどんな学問だろうか

271

政治の基礎概念 (273) 政治学の標準化 (277) ビギナーの
ための教科書 (279) 政治学をさらに学ぶ (281)

あとがき 285

事項索引 287

人名索引 298

Column 一覧

- ①-1 自由主義, リベラリズム, リベラル vi
- ①-1 利己的な動機, 利他的な行動 8
- ①-2 政治とはなにか 11
- ①-3 誤解しやすい政治学の言葉 19
- ②-1 エリート 26
- ②-2 政治学と性教育 34
- ②-3 多数決の難点 39
- ③-1 団体の不思議 46
- ③-2 G. サルトーリの政党システム論 51
- ③-3 野党という言葉 56
- ④-1 権力・権限・影響力——「偉さ」「強さ」とは何か 66
- ④-2 獵官制 76
- ④-3 外交とプロトコル 79
- ⑤-1 マスメディアの「不偏不党」 86
- ⑤-2 戦争の時代の宣伝 91
- ⑤-3 政治における議題設定 96
- ⑥-1 儒学 108
- ⑥-2 モンテスキュー・モデル 110
- ⑥-3 民本主義 117
- ⑦-1 寛容と忍耐 129
- ⑦-2 団地の主婦, バイシクル・シティズン 131
- ⑦-3 55年体制 137
- ⑧-1 共和主義 147
- ⑧-2 寛容と政教分離 151
- ⑧-3 イギリスの議院内閣制とアメリカの大統領制 155
- ⑨-1 右と左, 保守とリベラル 165
- ⑨-2 義務教育と規律化 170
- ⑨-3 女性のいない民主主義 173
- ⑩-1 マルクス主義の影響力 183
- ⑩-2 全体主義と権威主義 188
- ⑩-3 世界大戦と戦後福祉国家 191
- ⑪-1 代表論の源流——プリストル演説 204
- ⑪-2 ルソーの「一般意志」をめぐる 206
- ⑪-3 専門家と素人をつなぐ 212
- ⑫-1 福祉国家のあらまし 219

⑫-2	社会契約という考え方	222
⑫-3	ジェンダーという視点	227
⑬-1	武装する権利	236
⑬-2	戦争と女性	242
⑬-3	連邦制と地方自治	244
⑭-1	抽選と輪番, 自由な討論——アテネの民主政	254
⑭-2	ジェンダー規範を脱構築する	259
⑭-3	「穏和な専制」	265
終-1	ジェンダーの不在・隔離・主流化	278

図表一覧

図 1.1	公的部門で働く職員数 (人口 1000 人当たりの割合) ……………	14
図 3.1	有権者の利益や意見の分布 ……………	50
図 3.2	日本における政党の変遷 ……………	58
図 4.1	一元代表制と二元代表制 ……………	69
図 4.2	各国議会の議席配置 ……………	71
図 5.1	戦争プロパガンダの例 ……………	93
図 6.1	「明治会堂演説之図」(松斎吟光画) ……………	111
図 6.2	ハングルのルビがある選挙ポスター ……………	115
図 6.3	戦前の政党内閣期の総選挙の結果 ……………	118
図 8.1	アリストテレスの六政体論 ……………	145
図 9.1	ルソーの肖像 (M. ラトゥール筆, 1753 年) ……………	163
図 9.2	女性参政権も含めて測定した各国の民主化の歩み ……………	172
図 11.1	ポリアーキーへの経路 ……………	202
図 11.2	衆議院議員総選挙における年代別投票率 (抽出) の推移 ……………	209
図 13.2	近年におけるデモクラシーの世界的後退 ……………	246
表 1.1	ある政治家の 1 日 ……………	7
表 1.2	参議院選挙比例区に立候補した主な「組織内候補」 ……………	17
表 5.1	どのエリートに影響力があるか ……………	88
表 12.1	母子世帯と父子世帯の状況 ……………	225
表 13.1	カント『永遠平和のために』の概要 ……………	235
表 終.1	戦後日本でよく読まれた政治学の教科書の目次 ……………	274

- * 大学での学びや、学問の世界では、情報やデータの出所（典拠）はどこか、それは信頼できるか、という点がとても重要となります。そのため、学術的な文章やレポートでは、参考にしたたり、引用したりした本や論文をはっきりと示すことがルールです。本書では、そうした文献を各章末に一覧にして示し、本文中で言及する場合には、著作者の姓と刊行年で表記します（ページ数も示す場合には、コロン（:）ののちにページ数を記します）。たとえば、第1章の INTRODUCTION に登場する（濱本 2002）は、章末の文献リストに掲げた 濱本真輔 2022『日本の国会議員』中公新書 という本を指します。
- * 文献リストのうち、翻訳書に付した〔 〕内の数字は、外国語で書かれた原著の初版刊行年を示しています。文庫本に付した〔 〕内の数字は、翻訳書の場合には原著の初版刊行年を、それ以外の場合は、その日本語書籍の初版刊行年を示します。
- * 引用にあたっては、読みやすさを考慮して、訳文を修正している箇所があります。また、旧字体は原則として新字体に改めています。

【有斐閣ストゥディア】

政治学入門——歴史と思想から学ぶ

A Guide to Politics: New Knowledge and Old Wisdom

2023年4月30日 初版第1刷発行

著者 犬塚元・河野有理・森川輝一
発行者 江草貞治
発行所 株式会社有斐閣
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-17
<https://www.yuhikaku.co.jp/>

装丁 キタダデザイン
印刷 株式会社理想社
製本 牧製本印刷株式会社
装丁印刷 株式会社享有堂印刷所

落丁・乱丁本はお取替えいたします。定価はカバーに表示してあります。
©2023, Hajime Inuzuka, Yuri Kono, and Terukazu Morikawa.
Printed in Japan. ISBN 978-4-641-15108-6

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ICOPY 本書の無断複製（コピー）は、著作権法上での例外を除き、禁じられています。複写される場合は、そのつど事前に、（一社）出版者著作権管理機構（電話03-5244-5088、FAX03-5244-5089、e-mail:info@icopy.or.jp）の許諾を得てください。